

漢法苞徳塾資料	No. 228
区分	治療論・配穴
タイトル	『難経』の撰穴原理をめぐって
著者	八木素萌
作成日	1991.11 日本経絡学会特別研究発表

## 1. 序言

日本経絡学会の16回学術総会以来の「鍼灸における『証』について」の討論は『難経』16難の方式を主とした現行の撰穴論は、もっと拡張しなければならないことについての合意をほぼ成立させている。それは、50年の臨床経験が投げ掛けた問題が、六部定位脈診その他の問題が多面的に討論された結果の一つであると思われる。病は複数経に反応することも問題にされたが、そういう反応機構を整合的に説明できる「論」が求められる。この「論」は『難経』の記述の中に展開されている。また、病因の診別論や病状に対応する撰穴と治療の論も展開されている。「69難」の原理は、『難経』の多面的な「撰穴・配穴論」の一部である。従って「撰穴原理を拡張する必要」との関連で『難経』に記述されている「撰穴・配穴・取穴」の論について検討するのが小論の目的である。

## 2. 撰穴の前提問題

「難経脈論の構造」(学会誌No.12所収)で報告したように、「補瀉を決定するに際しては、脈に従うのではなく病そのものの虚実に従うべきであり、これは誤治を免れる為に留意しなければならないことである」と言う事が「81難」に極めて明瞭に記述されている。関連して「16難」では「肝脈が得られても、腹証と外候と病候などが、肝病であることを指示していない場合には、肝病と診断してはならない」と言うが、この立場は他の全ての臓にも及んでいる。

「49難」では「正経自病」の定義を明らかにしている、また、「心病」を例に、木(風)・火(熱)・土(飲食労倦)・金(傷寒)・水(中湿)という「外感の五邪」に侵襲された場合の「病候・脈象の特徴」から、病邪の性質を診別する論を明らかにした。これは「74難」その他の撰穴理論と呼応している。

## 3. 補瀉選択の問題

「補瀉」決定の根拠の問題では、「48難」の「三虚三実」が、「診の虚実(切診)」・「脈の虚実(脈診)」・「病の虚実(病候)」について判断の基準を示しており、この「病・脈・診」の三者の尺度には質的な相違があることが分かり、この「三者」を常にイコールであると前提して治療を組み立てるのは危険性を含んでいると分かる記述である。

「13難」の「上・中・下工」を定義している記述と考え合わせると、四診による総合判断を求めて

いる立場は明確である。「81 難」の「補瀉論」と関連が深いので、撰穴の前提問題として考慮すべきであろう。

いま一つの、撰穴の前提問題には、「穴性」・「経性」の認識という問題がある。これを記述する「難」は多い、しかし、ほとんど「撰穴・配穴・取穴」の原理と重複した記述になっているように見受けられる。

また、「難経の補瀉論に関して」（学会誌 No.16 所収）を報告した時に触れたように、「調気ノ方ハ必ズ陰陽ニ在リ」（72 難）・「栄衛ノ通行、此レ其ノ要ナリ」（78 難）と記述され、鍼治の要諦が「陰陽の調和」と「栄衛の通行」である事が示されている、また、取穴の補瀉と手技の補瀉とが厳格に統合されている点は注目すべき記述となっている。

#### 4. 撰穴論を記述する難

「28 難」は「奇経」の流注を記述し「正経」との関係論じているが、最後に「其受邪気 畜則腫熱 砭射之也」と言う。「29 難」は「奇経」の病証を記述しているが、具体的な治療や取穴は記述していない。「28 難」の「砭射之」というのは「奇経」病の治療の基本を記述したものであると言う『古本難経闡註』（清・丁錦）の解釈は採用できるものであろう。「29 難」に記述されている奇経の病証は「寒」病証に他ならない点を注目すべきであろう。

「31 難」は「三焦者 水穀之道路 気之所終始也」として「上焦…在胃ノ上口ニ在リ 納レテ出ダサザルコトヲ主サドリ 其ノ治ハ 中ニ在リ」「中焦ハ 胃ノ中 ニ在リ…水穀ヲ腐熟スルコトヲ主サドリ 其ノ治ハ臍傍ニ在リ」「下焦ハ 膀胱ノ上口ニ当タリ 清濁ヲ分別スルコトヲ主サドリ 出シテ納サメザルコトヲ主サドリテ 以ッテ伝導スルナリ 其ノ治ハ臍下ノ一寸ニ在リ」と消化管の通過障害に対する治療部位（つまり取穴部位）を明記している。「35 難」は六腑の生理的機能の一つひとつ約言して「伝陰気而下」と概括して後、最後の部分に「下焦之所治也」と結論的に記述する。この部分の「治」については「六腑」機能の全体的なものを統括して「所管」することであるという解釈が一般的であるが、「統括的所管」が「下焦」であるならば、此処は消化管の「伝導障害の治療」の「重心」を指示したものと言える。これらは「44 難」の「七衝門」の記述と呼応している。

「45 難」は「八会穴」を論じて「腑・臓・筋・髓・血・骨・脈・気」などに「熱病内ニ在ルハ 其ノ会之気穴ニ取ルナリ」と結んでいる。これは「病の熱」の所在の診定問題を提起し、さらに、これらの器官（または組織）部の「病熱」の取穴を指示したものである。また、これは「69 難」の「正経自病」と関連が深いものと思われる。「49 難」は「正経自病」について定義しており、これと「62 難」「66 難」の原穴論とも関連があるので、「原穴」と「八会穴」と「68 難」の「五俞穴の主治証」を「セット配穴」することの可能性を示唆していよう。

## 5. 時邪のとり扱い問題

「68 難」の「五俞穴」の主治証の記述が、従来の意味での「本治法」においても取穴論として運用できることは、既に小野文恵師が確立されている。

「70 難」と「74 難」の意義は極めて重要なものであるが、これまで無視されて来たかのように、理論的検討も臨床的研究も行なわれていないに等しい。鍼灸治療における補瀉の臨床運用感覚や、病証の虚实論の臨床感覚の問題と関係が深いのかも知れないが、奇異に感じられる程である。この重要性というのは、「人気の在る所」、「気の在る所」（条文から、この気とは外邪である事は明瞭）を刺せと言う大原則を述べている所であろう。これは広義の「傷寒」を論じている「58 難」とも極めて密接な関係にあるものと思われる。「春ニ井ヲ刺スハ 邪ノ肝ニ在リ、夏ニ榮ヲ刺スハ 邪ノ心ニ在リ、季夏ニ兪ヲ刺スハ 邪ノ脾ニ在リ、秋ニ経ヲ刺スハ 邪ノ肺ニ在リ、冬ニ合ヲ刺スハ 邪ノ腎ニ在レバナリ」と述べて「五臓ノ一病ハ 輒ワチ五色有リ…四時ニ数有リテ 春夏秋冬ニ并シ繋スルモノナリ」と四季の外感の法則的とも言える病機性を指摘して、季節に応ずる「五俞穴」の取穴が指示されている。これは「68 難」の「五俞穴主治証」の記述と明瞭に対応している。

「75 難」は「81 難」にいう「金木ハ当サニ更ゴモ相イニ平ニスベシ 当サニ金ノ平木ヲ知ルベシ」と「金木水火土ハ 当サニ更ゴモ相イニ平ニスベシ 木ノ実ツサント欲ツサバ 金ハ之レヲ平ニスベシ…水ノ実セント欲ツセバ 土ハ当サニ之レヲ平ニスベシ」（75 難前段）に見合っているが、後段の「…子能ク母ヲシテ実ナラシメ 母能ク令子ヲシテ虚セシム 故ニ火ヲ瀉シテ水ヲ補シ 金ヲシテ平木ヲ得ザラシメント欲ツスルナリ 経ニ日ウ 其ノ虚ヲ治ス能ワザレバ 何ゾ其ノ余ヲ問ワントハ 此レノ謂ナリ」とは趣きが異なっている。「81 難」の症例は「肺実肝虚」であるが、この後段で「肝実肺虚」と反対の例が記述されているから、前段と後段の方式を区別して解釈して臨床的に運用をしなければならないことが示唆されているものと思われる。たまに見られる「75 難」の方式を運用した症例報告には、『医学発明』（李東垣）の「五邪相干の五臓病証」と治療を論じている部分などのような病証論的な検討が乏しいのは残念である。

「73 難」の記述は、取穴に際して論理的根拠があれば代用穴が運用可能で有効であることを示唆している。「77 難」は治療に際して「伝病論」に導かれた取穴の必要性を指摘したものであろう。

## 6. 取穴の間接的示唆

間接的な示唆と考えられるものが他の難に記述されている。それは、「陰病行陽 陽病行陰 故令募在陰 兪在陽」（67 難）であり、また剛柔関係論が「64 難」「40 難」「33 難」などに展開されている。陰と陽とが交流して相互に調和を保つ状態が、生々した躍動的・生活的な状態をもたらすものであれば、この生産的な関係性の位相から、陰と陽との相関を把握した側面を「剛柔」として表現しようとした記述となっている。この剛柔の関係には、天干の陰陽分類の陰干と陽干との相互関係、地支の陰陽分類での陰支と陽支との相互関係、それらは五行に分類されているので五行的に同じ五行内での天干と地支の相互関係、などを抱えているように見える。それは五行の相生関係と相剋関係という概念の語彙範疇が、実は平板なものでは無く複雑で錯綜した立体的な論理体系を持ったものである事を示している。これを端的に記述している「難」として「33 難」と「40 難」「64 難」が

ある。

これらを単に、剛柔論と天干や地支における相生論を運用して、生理を説明しているに過ぎないものと受け止めて良いのであろうか？むしろ、撰穴論を暗示的・間接的に示唆していると受け止めるべき所であろう。それは積聚の発症構造を記述している「56 難」が、配穴論を記述していないことと関連する可能性を検討すべきであると思われるからである。

## 7. 残されている課題

- (1) 奇経問題
- (2) 絡脈と奇経脈との関係問題
- (3) 気血と衛榮の問題
- (4) 癲と狂
- (5) 真（頭痛と心痛）と厥（頭痛と心痛）
- (6) 痢と泄瀉
- (7) 「気の所在」～経と穴の開闢の問題
- (8) 広義の傷寒（中風・傷寒・湿温・熱病・温病）の汗法と下法の問題
- (9) 「45 難」の「熱病内ニ在ル者ハ 其ノ会之気穴ニ取ルナリ」と  
「58 難」の「皮寒熱」「肌寒熱」「骨寒熱」など「熱の所在」の診別と治法の問題
- (10) 七衝門の調整治療の問題
- (11) 「40 難」の記述は「臭気を知」ること、「音を聞」く事、の仕組みに関する説明がある。  
五感の全てについて同様な論理で説明する課題

等々は治療臨床論、撰穴・配穴・取穴論として、『難経』が提示している方式を敷衍したり、提示されていない面について探究したりして、解決して行かなければならない課題であると言えよう。